

菊池溪谷に生息する両生類・爬虫類

カエルやサンショウウオなどの両生類の多くは、水辺で生活を始め、湿った森で成長し、産卵のために再び水辺に戻る。菊池溪谷のようにこの 2 つの環境が共存している場所は、彼らにとって理想的な生息地であり、両生類を餌とする種などの爬虫類も集まってくる。菊池溪谷に生息する両生類・爬虫類の代表的なものを紹介する。

チクシブチサンショウウオ (*Hynobius oyamai*) は、溪谷の林床や清流に棲息する。日中は岩陰に潜み、夜間だけ出てきて餌となるワラジムシなどの昆虫を探するため、めったに見ることができない。サンショウウオの成体は体長 11~15cm で、青灰色をしている。4 月から 5 月にかけて水中の岩陰に卵を産み、幼生は夏に小川や水たまりで泳ぎ、水生昆虫を捕らえる姿がよく見られる。秋には森に移動し、食性も変化する。九州北東部のみに生息するとされる。

菊池溪谷で最もよく見られるカエルは、黒褐色の**タゴガエル** (*Rana tagoi*) である。体長 5cm ほどで、川辺の小さな淵や水たまりの近くによく見られる。真珠のような白色のオタマジャクシが卵の中の栄養分だけを食べて成長し、完全な暗闇を必要とするため、カエルは地下の流水に産卵する。オタマジャクシは水から出てくる前、成長するとともに徐々に色素がついてくる。体長 18cm にもなる日本最大のカエル・**ニホンヒキガエル** (*Bufo japonicus*) もよく見られ、溪谷の散策路の水たまりでその黒いオタマジャクシを見ることができる。一方で、**カジカガエル** (*Buergeria buergeri*) というメロディアスな鳴き声が特徴的なカエルはなかなかお目にかかれない。その鳴き声は 4 月から 7 月の繁殖期にオスがメスを呼ぶために使うもので、日本の詩歌にも初夏の季語として使われる。

落ち葉が堆積した湿った林床には、**アカハライモリ** (*Cynops pyrrhogaster*) と**タカチホヘビ** (*Achalinus spinalis*) が生息している。アカハライモリはトカゲに似た小型のイモリで、腹部に赤と黒の模様がある。川の近くの水たまりでくつろいでいるのをよく見かける。この模様は個体によって異なり、イモリの寿命である最大 25 年間ほとんど変わらない。赤色は毒の兆候だが、この動物の毒は通常、人間には危険ではない。一方、濃い灰色をしたタカチホヘビは毒を持たず、人目につかない場所を好み、主に夜間に好物のミミズを求めて動き回る。